
ホワイト・クリスマス

雪場

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホワイト・クリスマス

【NZコード】

N4759A

【作者名】

雪場

【あらすじ】

普段と何の変わりもなく訪れたその日。一人ぼっちのクリスマスに気持ちが沈む蘭だつたが、やがて降り出した雪と共に…。夢と現実が交錯するちょっとぴり幻想的な話。そんな事が起こるのも、きっと聖夜だからでしょう。

その日でさえも、普通の日と同じ様に、灰色の見慣れた階段を上り「毛利探偵事務所」と白字で書かれたガラス戸を押した。
人気のないがらんとした室内。

…お父さんは今日も長谷川さんたちと麻雀。

「ナン君は阿笠博士の家でクリスマスパーティって言つてたつけ…。

大きなソファーに体を投げ出すように座ると、前の机の上に持つていた紙袋を置いた。

小さくため息をつくと、そのリボンのかかった小さな白い包みに向かって咳く。

「今日も一人ぼっち… 戻つてこなかつたね、新一」

凍えるような部屋を暖めようと、窓の下にあるファンヒーターへ向かつた。

ふと気になつて、窓を開けてみる。

重くどんよりとした1~2月の雲から、大粒の雨が黒いアスファルトの地面を叩き始めている。

どこか遠くから流れてくる明るいクリスマソングも、少し錆付いてるようになつてゐた。

「はあ…雨か…」

余計に憂鬱な気持ちが募つて、少し乱暴に窓を閉めた。

しばらくすると、徐々に部屋が暖かくなつてきた。

ソファーにまた座り、特別するあてもなくただぼーつとしていた。

時折後ろからヒーターの柔らかい風が髪を撫でている。
そう思つているつむに段々と上の瞼が重くなつてきて……。

ふと気がつくと、私は堤無津川に架かる橋の上にいた。
灰色に凍りついた欄干にコートを羽織つた腕を乗せ、街の灯りを眺めていた。

隣を見ると、そこにいたのは……新一。

新一も、両手を欄干にかけて、川を挟んで両岸に広がる、宝石箱のような色とつどりの光の粒を、どこか懐かしそうな目で見つめていた。

「新一……帰つてたの？」

新一がこいつを向いた。

「ああ」

妙にさつぱりとした口調だつた。

それに、言い終えた途端、また川のぼりを向いて、何か考えてるみたいだつた。

そんな新一を見ていると、急に胸が締めつけられる様に苦しくなる。……一体いつまで、こうしていられるの……？

「また……すぐに行つちやうの？」

新一の顔と、街の灯りが、ぼんやりと滲み始めていた。

新一は、何も言わなかつた。

ただ、私のほうを見て、ちょっと困つたような顔をしてゐるだけ。

「それが答え。」

気づかれないように一度下を向いて目をこすつて、もう一度新一の

顔を見た。

：優しい表情を、田に焼き付けるように、またしづらへ余くな
る分まで、しっかりと見ておきたかったから。

不意に私の鼻の上に、白い一片が舞い降りた。

「あつ、雪…」

新一もゆっくりと上を見上げた。

また私のほうを向くと、悪戯っぽく微笑んだ。

「知ってるか、蘭。雪の聖夜にした願い事は、次のホワイトクリスマスのときに、サンタさんが叶えてくれるってさ」

「…本当なの？」

そのときにはもう、新一は目を閉じて、何か祈っているみたいだつた。

急いで私も手を組み合わせて、一つしかない願い事を祈った。

「終わつたか？」

新一の声に目を開け、無言でうなずいた。

「なあ、蘭は何お願いしたんだ？」

私に聞いたのに、新一の目は川面に映る米花町の灯と、雪の舞う夜空を眺めているまま。

：どこか少し寂しげに。

でも、そんな表情にわざと気づかないふりをして、いつひとつと微笑んで言つた。

「新一の事件が早く解決して、またずっと一緒にいられますよつこ、元は？」

新一も、微笑んで何か言おうとした。
でも、何も聞こえなかつた。

新一の口は動いているのに、声だけが届かない。

どうして?どうして新一の声が聞こえないの?

新一は何を、お願いしたの?

ねえ、答えてよ新一……

「…新一…」

そう呟いた自分の声で、現実へ引き戻された。
目が覚めると、そこはソファーの上。

前のテーブルに置かれた渡す相手のいないクリスマスプレゼント。
つけっ放しのテレビから聞こえる乾いた音楽。
少し、夢から覚めたことを後悔してため息をついた。

不意に、テーブルの上の携帯が低いモーター音と一緒に小刻みに動き始めた。

「誰からだらう?…こんなときに」
見ると、ついさっきまで一緒にいた人。
あわてて携帯を耳に押し当てた。

「蘭か?」

夢の中よりも、ずっと優しい声に聞こえた。

「新一…今どこにいるのよ?」

「それより、ちょっと外、見てみるよ

質問をいつもみたいにほがらかした新一に少し頬っぺたを膨らませながら、さつき勢い良く閉めた窓を、もう一度開けてみる。

「あ……雪……？」

いつの間にか、雨は雪へと変わっていた。大粒のぼたん雪が、聖夜に舞っていた。

「……綺麗……」

そう呟くと、新一が言った。

「なあ蘭、知ってるか？」

えつ……これつて……もしかして……。

「雪の聖夜にした願い事は、次のホワイトクリスマスのときに、サンタさんが叶えてくれるんだぜ」

やつぱり……。

「蘭は、何お願いするんだよ？」

電話の向こうの新一に、ついついと微笑んだ。
これから先は……夢とは違うよ、新一……。

「新一が、無事に戻つて来れますよ！」

今は……それだけで充分……。一皿……新一の姿を見られるだけで。

部屋のテレビがクリスマスソングを奏でていた。

その中の一言が、妙に印象に残った。

「ねえ、『あわてんぼうのサンタクロース』だつたらいいのにね」

「（ぼそつ）蘭……」

「だつてさ、次のホワイトクリスマスが来る前に、願いを叶えてくれるでしょ……早く……会いたいよ……新一……」
現実でも、目の前を通り過ぎる雪と、明るい街の灯が、どんどん滲んでいった。

涙声が新一に聞こえないようだ、硬く目をつぶつた。

ピンポーン

突然鳴ったチャイム。

誰なの、こんな時間に……。

携帯を握り締めたままドアへ向かつた。

曇りガラス越しに見える人の影。

「あのー、どなたですか？」

ドアの向こうの人影が少し動いた。

「ホーホーホー、サンタクロースじゃよ」

優しそうなおじいさんの声。でも、サンタさんって……？
いぶかりながら、ガラス戸をゆっくりと押した。

向こうから引かれて、一気にドアが開いた。

勢い良く開いたことでバランスを崩して前につんのめった。

そんな私を受け止めてくれたのは…新一。

「あわてんぼうのサンタクロースの『到着だぜ。メリークリスマス、蘭』」

そう言って新一は、私をぎゅっと抱き締めた。

…ありがとうございました、サンタさん。

蘭と新一の再会を、灰原は廊下の奥から見ていた。
新一の影になつて蘭からは見えない場所。

二人の姿を邂逅が始まるまで見届けると、踵を返して背を向けた。

「魔法が解ける前までは戻つてくる」とね、シンティレラ君「聞こえないのを承知で、むしろ自分に聞かせるように呟いた。

ビルから出ると、まだ雪は降り続いていた。
ふつと上を見上げる。

「私にはサンタさん、いつ来てくれるのかしらね…」

小さく肩をすくめると、静かに歩き出した。

クリスマスソングが、雪の米花町を真夜中へ向かって送り出していく。

（後書き）

いつも、雪場です。いきなりの季節はずれネタ、申し訳ありません
（苦笑）

書き終えたのは冬で季節ピッタリだったのですが、諸事情により気がつけば春（笑）今年の冬まで待つ根気もなく、投稿をさせていただきました。

短編初挑戦なので、まだまだ力不足なところもありますが、もし楽しんでいただけたなら幸いです。

正夢…私には経験ありませんが、友人によると疲れているから起こるとか…。まあ、そんな説明は興を削ぐだけですけど、普段非科学的なものは「好きだけど信じない」ものですから（笑）

長くなつたのでこの辺で。

最後になりましたが、読んでくださつた皆様、どうもありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4759a/>

ホワイト・クリスマス

2011年2月2日15時08分発行